西谷啓治著作集

第1卷

創文社版

〔西谷啓治著作集 第1巻〕　第I期　第3回配本

一九八六年一二月一五日　第一刷發行
一九九八年五月一〇日　第四刷發行

著者　西谷啓治
發行者　久保井浩俊
印刷者　安達精治

發行所　株式會社　創文社
〒一〇二―〇〇八三
東京都千代田區麴町二―六―七
電話　〇三―三二六三―七一〇一
振替　〇〇一二〇―九―二四七二

著作權者との申し合せにより檢印省略

曉印刷・鈴木製本

ISBN4-423-19701-4　Printed in Japan

根源的主體性の哲學・正

緒　言

本書には著者がこの十年間種々の雜誌に發表したもののうち、思想史的研究に屬するもの及び一二將來の改稿のために殘したもの以外のすべての論文を收めた。この十年間は著者にとつては苦澁な摸索の時期であつた。そのため、此等の諸論文も色々の機緣に促されて書かれたもののみで、なかには『道德に於ける時代性と恆常性』や『人間解釋の類型性』の論文の如く、指定された題目の下で書かれたものもある。從つて今までは、もし將來自分なりに多少まとまつた思想が得られるならば、その方を先に出して見ようと考へて居たのであるが、併しその後氣持が變つて、一應淸算する意味で、從來發表したものを纏めて見ようといふ氣になつたのである。今度本書に收めるに當つてはどれにも多少の添削を加へた。また紙數の關係などで前半しか發表しなかつたものには、殘りの原稿に手を入れて新たに加へて置いた。

此等の論文は、今言つたやうな性質のものであるから、一つの統一的な立場から書かれたのではなく、著者としてはそのいづれにも、單に自分の斷片しか現れてゐないやうな不滿を感ずるのであるが、併し今から振返つて見ると、おのづから其等の底を通ずる何ものかがなくはない。今それを取出して、試みに『根源的主體性の哲學』と名づけたのである。「われ在り」といふことの窮極の根柢は底なきものである、吾々の生の根源には脚を著けるべき何ものも無いといふ所がある、寧ろ立脚すべき何ものも無い所に立脚する故に生も生なのである、そしてさういふ脫底の自覺から新しい主體性が宗教的知性と理性と自然的生とを一貫するものとして現れて來る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大體そのやうな見方が本書の基調である。それは、比較的前の論文では『生に於ける個別と一般』に於ける無の隱蔽的現前としての自我性といふ考や、『歴史的なるものと先天的なるもの』に於ける實踐辯證法の「中」としての「根源の要求」といふ考などに萌してゐるが、自分としては、『宗教・歴史・文化』のうちで、特に「辯證法の辯證法」とか純一の行とかいふ考によつて、幾分それをはつきりさせ得たやうに思ふ。卷頭の論文はニイチェとエックハルトのうちに類似の立場を認めようとしたもの、次の『近世歐羅巴文明と日本』は、今いつたやうな主體性の精神が現代歐洲の摸索してゐる精神であるといふ著者の意見を、近世歐洲精神史の素描を通して表示し、同時に同じ精神がわが國の傳統のうちに既に早くから生きてゐたことを示唆しようと試みたものである。

附錄として加へた『西田哲學をめぐる論點』は、既に六年前に書かれたものである。然もその後西田先生の思想は勿論、そこに取扱はれてゐる他の諸先生の思想も大きな發展をなした。從つて今更それを本書に收めるのはどうかとも思はれるのであるが、人々の勸めもあり、又哲學の問題は恆に新たであるといふ考へ方も出來るかと思ふので、敢て此處にそれを加へることにした。讀者にはその書かれた年を念頭において讀んで頂くやうにお願ひしたい。

また本書を第一部『宗教と文化』、第二部『歴史と自然』と分けたのは、比較的近頃書いたものとそれ以前に書いたものとが、やはりおのづから右のやうな主題を中心としてゐるからである。從つて本書に於ける論文の排列も嚴密にではないが、ほぼ、近頃のものから以前のものへといふ順に隨つてゐる。なほ、ここに收められた以前のものも、適當な機會に、第三部『思惟と意志』として別册にして公にしたいと思つてゐる。

ここに集めて見て、改めてその貧しさに驚き、われながら野草の花環でも見るやうな氣がするのであるが、然

もそれすらわが敬愛する師友からの慈雨なしには育たなかつたであらう。ここに記して感謝の意を表する次第である。

昭和十五年九月

著　者

再刊緒言

舊著『根源的主體性の哲學』は第一部「宗教と文化」、第二部「歴史と自然」といふ二つの部分から成つてゐたのであるが、今度それを再刊するに當り、便宜上二つの部分を二册に分けて出すことにした。本書はその第一册である。その際、もとの表題を副題に廻はし、若干の誤字や誤植を訂正しただけで、本文はすべて變更を加へなかつた。

ただ一つ變更したのは、もと第二番目に置かれてゐた論文「近世歐羅巴文明と日本」を、今度は最後に廻はしたことである。このやうに配列を變へた理由は、この論文が、特にその最後の部分において、その書かれた當時の歴史的境位に卽した論述で終つてゐるからである。それが書かれたのは、第二次世界大戰が歐洲において勃發し、然もまだわが國に波及しなかつた間の時期である。その時期から現在に至るまでの大きな變化を考へれば、その論文はそのままでは不充分であり、多くの書き加へを必要としてゐる。併しそれは恐らくもう一つ新しい論文を書くことになるであらうし、今はそれは出來ない。のみならず筆者は、その論文本來のテーマである精神史上の問題からいへば、その問題もそれについて展開した筆者の論述も、現在なほ、ともかく一つの見解として成り立ち得るのではないかとひそかに信じてゐる。現在の時點で不充分なその論文をそのまま殘すことにした、その根本の動機はそこにある。もちろん、さう言つても、本來ならば當然保留か訂正をすべき若干の個所があることは事實である。例へば歐洲の一研究者が日本を、諸大國のうちの「最後の男性國家」と見做したことは、現在

の日本にはもはや妥當しないかも知れない。ヒットラー個人に對する評言についても同樣である。その頃の或る駐獨フランス大使は、スイスの作家ゴットフリード・ケラーの『村のロメオとジュリエット』をもぢつて、當時の彼を幾分皮肉まじりに「村のナポレポン」と評した。（この類比は、その後彼がロシア遠征においてナポレオンの轍を踏んだ時、一層現實性を增した。）筆者も當時その評言に同感であつた。併しその後の出來事を考へれば、かの論文中における彼個人に對する評言は訂正せねばならない。ただその場合でも、精神史的に見て彼の言說が、無視することの出來ぬ問題點を含むといふことは、渝りないであらう。

右に言つたやうな理由で、その論文をそのまま殘し、ただそれを最後に廻はしたのである。

昭和四十三年十二月

著　者

目　次

第一部　宗教と文化

ニイチェのツァラツストラとマイスター・エックハルト……五
一　ニイチェに於ける生の根源性……五
二　エックハルトに於ける生の根源性……三
三　宗教的生と實證的精神……二四
宗教・歴史・文化……三三
一　宗教と歴史と文化との聯關……三三
二　宗教に於ける三つの立場……三七
三　宗教的生の構造……四四
四　近世に於ける人間自主性の立場……五八
五　信仰主義の立場。理性と信仰の對立……六八
六　絶對無の立場。理性と信仰の統一……七七

七　宗教に於ける自然性。辯證法の辯證法。純一の行……八五
八　辯證法に於ける生と論理。文化と宗教……九〇

近代意識と宗教……九九

一　文化人と宗教……九九
二　宗教と原自然性……一〇四
三　近代の人間中心主義……一〇六
四　宗教的人格性……一一〇
五　絶對的否定卽肯定の働き……一一三

近世歐羅巴文明と日本……一二九

一　現代歐羅巴のエトス的雰圍氣……一二九
二　近世初期の精神……一三四
三　近世中期の精神……一二八
四　近代精神……一二九
五　ヒットラー運動の精神……一四四
六　日本の精神……一四七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二部　歴史と自然

道德に於ける時代性と恆常性……一五三
一　道德に於ける困難……一五三
二　行爲の質料性（技術的行爲）……一五四
三　カントに於ける「人間性」の理念……一六一
四　行爲に於ける質料と理念……一六八
五　理念の歴史的事實性。道德と宗教……一七六
六　道德に於ける時代性と恆常性……一七八
歴史的なるものと先天的なるもの……一八三
一　アプリオリに關する種々の立場……一八三
二　歴史主義。相存と現存……一九一
三　歴史的現實在の根源としての人間存在……一九九
四　根源の要求……二〇三
五　原動性卽形式としてのアプリオリ……二〇七
六　實踐辯證法的「中」としての根源の要求……二一〇

人間解釋の類型性とその意義――歴史認識論の一つの試み――……二二五
一　人間解釋の類型性……二二五
二　類型的解釋の特質……二二九
三　解釋の立場の限界……二三六
四　實踐的認識。解釋的操作の意義……二四四
生に於ける個別と一般……二五九
一　生きものと生命……二五九
二　個別者そのものとしての一般……二六八
三　種としての一般……二七一
四　個別性と一般性の生命的不二とロゴス的不一……二七四
五　類的生命と有自體……二七八
六　無の隱蔽的現前としての自我性と意識界……二八二
七　概念、判斷、推論、知的直觀。「もの」卽無……二八八
八　精神的生に於ける個別と一般（道德、藝術、宗教）……二九七
後　記

根源的主體性の哲學

第一部　宗教と文化

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com